



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

柴田, 昌三

---

CITATION:

柴田, 昌三. あとがき. 時計台対話集会 2011, 7

ISSUE DATE:

2011-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176974>

RIGHT:

# あとがき



柴田 昌二

しばた しょうぞう

京都大学フィールド科学教育研究センター  
副センター長・教授

第七回時計台対話集会のテーマは、人づくりとしました。そして、社会連携や、これに教育の重要さも絡めた基調講演、講演報告をいただきました。また、これらのご発表に対して、会場の皆様からも様々なご意見を活発にいただくことができました。

第二部ではお二人の先生から基調講演をいただきました。まず、私ども京都大学フィールド科学教育研究センター（以下「フィールド研」）がその設立以来世に問い続けてきました森里海連環学の創始者であり、初代フィールド研センター長でもある田中克京都大学名誉教授から、森里海連環学という学問領域がグローバルスケールまで広がっていることを、ご報告いただきました。続いて、フィールドサイエティー事務局長の久山慶子さんから、同様の考え方をより地域性豊かに展開されていく中での、教育、あるいは人付き合いの重要性について話していただきました。久山さんが長年にわたって行ってきたことは大変大事なことであり、ありがたいお話をしていただいたと考えております。

第二部の講演では作家で、時計台対話集会の応援団長を自認していただいている天野礼子さんから、社会連携の重要性を様々な事例を通してお話しいただいたほか、フィールド研に対する熱いエールもいただきました。感謝申し上げます。一方、報告としてフィールド研舞鶴水産実験所の上野正博助教からいただいたお話は、人間の生存の危機を感じさせるような話でした。私は日頃から、この話が番当てはまるのは日本人ではないか、世界で最初に絶滅する民族は日本人ではないかと思っている部分がありますので、皆様的心して考えなければならぬ話であつたのではないかと思っております。

今回の時計台対話集会では、幼稚園児、小学生からご老人にいたるまでのさまざまな世代の方々についての人づくりの必要性が提示されたと考えます。私たち、フィールド研の教員は大学生を主な相手にした人づくりをしています。基調講演の中で田中先生が「人が変わる」と紹介されていた、フィールド研社会連携教授で作家のC・Wニコル氏のアフィンの森での実習、これは現在私が引き継いでおりますが、今でもその効果は薄れていません。今では各年の受講生たちが、毎年一回同

## 第7回時計台対話集会 講演録

平成23年2月28日  
第1刷発行

編集・発行 ● 京都大学フィールド科学教育研究センター  
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
TEL 075-753-6416

編集協力 ● サイファーアソシエーツ株式会社

窓会を開くようになっていきます。同窓会はどこかの店の中でやるのではなく、自然の中でのバーベキューパーティです。最近では、彼らはメーリングリストまで作っており、頻繁に情報交換を行っています。アフンの森という、自然豊かな場所で経験したことを一つの共通項として、人のつながり、あるいはそれに対する思い入れというものがひろがっていく様子は、すばらしいと思います。数は少ないけれども今の若い人たちではできないという決めつけはだめだろう、という一例として敢えて紹介させていただきます次第です。

これまで七回にわたって毎年開催してきた時計台対話集会は、フィールド研では第一期と位置づけたいと考えております。そして第一期は、田中名誉教授と竹内名誉教授が森里海連環学と名付けられた学問領域を社会に認識していただくための期間であると考えています。このスタンスはいままでも続けていいものではないかという意識を私どもは持っておりますが、続く第二期としては学問的にも社会的にもこの森里海連環学をいかに展開していくかを考える時期にしたいと思っております。

そこで、今回の時計台対話集会は第二期の最後として、キーワードに「人づくり」を考えました。講演で久山さんも述べられました「場づくり」や「時間づくり」は非常に大事です。特に「時間づくり」の重要さをこでは強調したいと思います。久山さんのお話の中に「気がつく」と二十五年もやっていました」といったものがありました。少なくともこのような時間に対する感覚を持つて、この森里海連環学も展開していかなければならないのではないかと考えます。このようなことも含めて、フィールド研では、来年、あるいは再来年まで少し時間をいただき、時計台対話集会もしばらくお休みさせていただきたいと考えております。この間に森里海連環学の新たな展開を図る、あるいはそのための充電期間にしたいのです。これは対話集会をやめるということでは決してありません。少しの間、間まをとるということの意味しているとご理解いただきたいと思います。

フィールド研では、今後も森里海連環学による社会連携や人づくりに関して、よりいっそうの努力を続けていくほか、新たな異なる形での社会貢献活動を続けていく所存です。二、三年後には必ず第八回時計台対話集会を開催させていただきたいと思えます。そのときには、その間に蓄積された成果、あるいは、本日も紹介のあった概算要求事業による、略称「木文化プロジェクト」の成果をご報告させていただきたいと考えています。毎年のように時計台対話集会にご参加いただいている方々が多数おられることは重々承知しておりますが、次回に向けてしばらくお休みをいただくことをご理解いただけると幸いです。

最後になりましたが、今回の時計台対話集会にご後援いただきました京都府教育委員会、京都市教育委員会、フィールドソサイエティ、協賛をいただきました村田製作所、全日本空輸、エコロジカフエ、サイファアソシエーツの皆様、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございます。

